



11月



「倉敷づくりリーダーは君たちだ」

「非認知能力を育みリーダーを育成しよう」後編

令和六年五月十三日に倉敷国際ホテルで公益社団法人 倉敷青年会議所が実施した、倉敷市家庭教育学級事業 講演会の要旨を二回に分けてお届けします。講師は、岡山大学准教授 中山芳一（なかやま・よしかず）先生です。

● AIはパートナー

それではなぜ非認知能力がこんなに大事って言われているのか。「わんぱくでもない、たくましく育て欲しい」、知ってますか。約五十年前に流れていたCMのせりふです。非認知能力がバズるより前からめっちゃええこと言ってるんですよ。「わんぱくでもない、頭つかちじゃなくていいぞ、たくましさ」と非認知能力を伸ばせ」って、昔から言うてんの、なんて今バズってるのか。

リモートとか、チャットGPTなどの生成AIとか、今の時代すごくないですか。十年近く前に野村総研が「労働人口の約半分はAIとロボットで代替可能」とするデータを発表し、メディアは「AIに仕事が奪われる時代がやってきた」と言いました。でも僕は前向きに「AIとパートナーになつていく時代」って子どもたちに言いたいんです。

だって、僕らがやってたことをよりハイスペックにAIがやってくれるわけですから。逆に僕はAIにできないことをやったらいじゃん、って話なんです。

それって一体何か。例えば「大量の情報を早く間違えずに扱える」。これは明らかにAIが適任者です。「大量に」「早く」「間違えず」、この三つは、数字で評価できます。つまり、AIが得意なものは、「認知能力」なんです。一方で、AIが未だにできないのは、「他者の気持ちに共感して関わること」。例えば、教師や保育士、看護師、介護福祉士、企業の営業職など。これは未だにAIにはできないと言われます。なぜか。AIには感情がないからです。感情系は人間が得意で、感情こそが、人間にとっては重要なと言われています。感情を持つと、相手に共感できま

うかもしれません。あれは、パターンの中でやりとりしていて、感情は動いてないです。

それから、感情でもう一つ、意欲やる気を持てます。意欲がないと目標を決められないんですよ。例えば、今日どんなご飯を食べるのか。これも目標です。感情、意欲がなかったら、飯なんて何でもいいってことになるんですけど、実際そんな人ってほとんどいませんよね。これ、僕たちが感情を持つてからなんです。

改めて考えると、何が目標を決めた、例えば「旅行しよう」と思った時に、より適切な行き方、早い方法、楽な方法、安い方法など教えてくれるのは、AIです。そういう関係性です。僕たちは意欲を持って、目標を決めないといけないし、共感も必要です。僕たちが目標を決めるとAIが助けてくれる。だから、AIと僕たちはパートナーの関係にならないといけないです。で、AIは認知能力すごいんですよ。だったら僕らはというと、もちろん認知能力は必要だから、勉強はしてください。認知能力は大事で、それにプラスして、「AIができない部分めっちゃ大事よね」ってことで非認知能力が注目されてるんですよ。さらに、我々が、幸福感を持ち続けながら生きていくためにも、非認知能力が必要なんです。

● 変化の波に乗ろう

今から十年以上前にVUCA時代と言われて、七八年前に内閣府がソサエティ5.0、超スマート社会が来ると言いました。それよりも最近、コロナ禍、西日本豪雨災害などが起こりましたね。つまり、急速で急激な変化の波が押し寄せてるわけです。すると、生き方の正解の予測がつかないんですよ。例えば、僕が子どもの頃は、「いい高校↓いい大学↓いい会社に就職↓年金生活」、これが正解勝ち組のように言われてました。今は、そういう時代ではないし、「仕事が奪われる時代」みたいに、煽りたいわけでもないんです。だから中高生の子たちに言います。「そんなにいい波来てんだったら乗っちゃえよ」って。「生き方の正解がない」とか「急激な変化の波が押し寄せてくる」って、なんだか悲惨な言い方ですよ。そりゃ災害とかは極力避けたいですけど、本当に変化の波が来てるなら、その波に乗っちゃえばいいじゃないですか。乗ったもん勝ち。今そういう時代になってきましたよね。これ、ダーウィンが進化論で「最も強い者が生き残るのではなく最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることができるのは変化できる者である」って言ってます。ということ、我々が変化の波に乗るためには、やっぱり非認知能力が必要なんです。



乙島小学校 3年 おか田 そうま
(令和5年度)

「サソリのきょうだい」(版画)

サソリのせなかにある人の顔みたいなまようをプチプチを使って表しました。赤と黒がまざらないようにするのに苦ろうしました。

●大きく変わる我が国の教育

さて、次に、我が国の教育も大きく変わってきているという話をしたいと思います。現在の学習指導要領では、育成すべき資質・能力として、非認知能力に該当する部分ができ、非認知能力がより重要視されることとなりました。これにより、学校現場もかなり対応が必要なので、僕も一緒に対応しています。もう一つ、大学入試も変わってきてます。テストの点数で判断する大学が減り、小論文・面接などが増えています。小論文では、例えば、僕の本を出して「小学校の先生になったら、筆者が言う非認知能力をどう育てるのか書いて」という問題を出す大学がある他、人との連携や、多面的な捉え方を記述させる問題が増えています。そして、総合型選抜と言われる入試方法。これは、企業

就職試験のように、ペーパーテストより、面接やディスカッションで判断します。例えば高校時代までの経験と、そこから何を学んだか、また、大学で何がしたいのか、それらを自分の言葉でプレゼンします。説得力のあるプレゼンができれば合格です。ペーパーテストなしの大学もあります。今は、このようなペーパーレスな入試問題が日本の全ての大学の五十%を上回っています。

●非認知能力が発達する時期は

では、脳の中で、非認知能力に関係しているのはどこか。専門用語で前頭葉の前頭前野という、額のすぐ後ろ側が深く関係しています。思考や感情を制御するところで、まず三歳くらいまでの間にぎゅんと発達します。この頃、自分の頭の中で喋れるようになります。皆さん、普段思っていることを、外に出さずに頭の中で喋ってますよね。これを「思考」と言います。そして、九歳十歳くらいから、十八歳くらいまでにまたぎゅんと伸びます。この時期に、頭の中で喋っている中身が変わるんですよ。例えば、論理的や科学的な内容になります。「科学的」は、ファンタジーと現実を区別する思考です。調査によると、子どもがサンタクロースを信じなくな

った時期は、面白いことに三、四年生が多いです。これは、プレゼントをくれる現実のサンタと、ソリに乗って赤い服着たサンタの区別ができるようになってからです。

また、論理的思考を平たく言うと、辻褄が合っている、矛盾していないことです。日によつて言うことが違つとか、「好きにしているよ」と言いがた、全然好きにさせてくれない」とか、「矛盾していない」とつてことがあると、小学三、四年生くらいから見抜きま

況や捉え方によって変わるじゃないですか。マイナスの見方をプラスの見方にひっくり返してあげるといいですね。ただし、危険なこととか、人の迷惑になるようなことについては、「その行動はNGよ」とつて伝えてあげられたらいいですね。

さて、九歳十歳よりも前の時期の非認知能力は、ほとんど気質です。気質とは、生ま

けつて言ってもダメなんです。だから、小学生低学年くらいの時期までは、その気質を変えようとしな

(おわり)